

開催日：2019年11月22日（金）

講師：金田直之氏（石川県珠洲市役所 企画財政課長兼自然共生室長）

テーマ：「過疎地域イノベーションへの挑戦」

—SDGs&域学連携（金沢大学里山里海マイスターなど）&奥能登国際芸術祭—

導入（自己紹介）

金沢大学工学部建設工学科卒、1982年（昭和57）珠洲市役所入庁、2009年（平成21）～企画財政課長兼務 自然共生室長、まちづくり相談室長、奥能登国際芸術祭推進室長、能登SDGsラボ事務局長
→兼務が多いのは、過疎地ならではの。人口少ないので一人何役も。

1 珠洲市（すずし）

位置：能登半島最北端 人口：14,302人（平成31年4月1日）＊本州で最も人口が少ない市

世帯数：6,161世帯 高齢化率：48.6％ ＊毎年350人程度減

特徴：人と自然の共生が何世紀もの昔から続くまち。

平成の大合併をしていない←長く原発計画を抱えていたから（2003年・平成15年、原発計画凍結）
2011年「世界農業遺産」認定（日本国内第1号）

2 珠洲市におけるSDGs推進に資する取り組み

(1) 課題解決型の人材養成事業の継続

- ・廃校を改修して、『能登半島里山里海自然学校』開校（2006年/平成18年度）
- ・45歳以下の次世代リーダー養成「能登里山里海マイスター」に認定

(2) 持続可能な地域保全活動の構築

- ・NPO法人『能登半島おらっちゃんの里山里海』設立（2008年/平成20年度）
- ・森林保全活動、里山資源活用 例）椎茸・米・小豆等を栽培し、京都の料亭に販売

(3) 『能登SDGsラボ』開所（2018年/平成30年度）

- ・金沢大学や県立大学、国連大学、珠洲商工会議所、興能信用金庫、珠洲市など多様なステークホルダーが連携。産学官金のプラットフォーム機能
- ・SDGsをローカルな価値に変換・最適化し、文化として地域に浸透させてゆくチャレンジ拠点
- ・SDGs普及啓発、シンポジウム・セミナー開催

(4) 域学連携の推進

- ・国内初の公道での自動運転実証実験、空き校舎をゲストハウスに、黄砂研究…等

(5) 先端アートプロジェクトによる地域の魅力発信及びインバウンド促進

(6) 国内外地域との連携支援の拡大

- ・『能登里山里海マイスター』で育った人材を派遣

3 金沢大学との連携について（すべてのスタート）

- ・「地域づくり連携協定」締結（平成19年）
- ・文部科学省科学技術振興調整費で能登学舎開設
- ・『能登里山里海マイスター』『能登里山里海マイスター育成プログラム』（180人以上が修了）
能登の自然や文化を使い起業する人材も。例）クヌギの菊炭、能登の染物指ぬき、宿泊・飲食等
- ・寄付講座（平成26年度～）
- ・自動運転システム公道実証実験（平成27年～）
- ・2015年「第3回プラチナ大賞」大賞・総務大臣賞を珠洲市が受賞
2018年「第7回地域産業支援プログラム表彰事業」文部科学大臣賞を金沢大学が受賞
- ・その他連携協定…石川県立大学・金沢美術工芸大学・金沢星稜大学・金沢学院・金沢学院短期大学

4 奥能登国際芸術祭

(1) 概要

開催期間:2017年(平成29)9月3日～10月22日(50日間)

参加作家:11の国と地域から39の作家

来場者数:7万1000人(のべ40万人) 予想を大幅に上回る(NHK金沢で毎日放映＝県内で認知)

開催会場:旧保育所、旧公民館、鉄道跡地、空き家、空店舗、倉庫、海岸など約40か所

総合ディレクター:北川フラム

コンセプト:「最涯の芸術祭、美術の最先端」伝統文化と最先端の美術が響きあう

＊原発電力会社3社からの寄付が開催経費の一部に充てられた

＊泉谷市長「地域の人に自信と誇りを持ってもらいたい」

(2) 成果(効果)

・来場者アンケートより(限られた会場でしか回収できなかったが)

「来場者の出身地」→石川県内73%

「珠洲市への訪問回数」→初めて25%、2～5回60%、珠洲市在住15%

「年齢」→20～70代まで幅広く

「男女比」→37%:女性63%

「また珠洲市を訪れたいか」→はい98%

「芸術祭は楽しかったか?」→とも楽しかった・楽しかった97%

・経済波及効果

〈市内〉5.23億円 〈県内〉8.82億円

・目指した成果

〈交流人口の拡大〉経済効果(宿泊・飲食など)

〈遊休施設の活用〉壊されるはずだった空校舎等が展示スペース施設に(9箇所)

〈地域住民の意思の変化〉作品を通して改めて自分たちの「まち」を確認。市民の誇りの醸成
「市内にこんないいところがあるとは思わなかった」等多数

5 珠洲市がこれから目指すこと～SDGsの観点で新たな展開へ

(1) 奥能登国際芸術祭2020

・バリアフリー、ジェンダーフリー、国際化(インバウンド)の観点で実施

(2) マイスター第4フェーズ

・SDGs・ラボとの連携協働

(3) 人的ネットワークの拡大強化

・SDGsラボ「連携研究員」制度の整備

6 珠洲市の施策のポイント

(1) 小規模自治体ならではの方針決定のスピード感→泉谷市長4期目で安定継続した市政運営

(2) 市独自の「まちづくり支援員制度」をスタート(平成23年)→正職員に代わり各地の活性化策検討

(3) 大学連携が過疎地域の新たな可能性を拡大→青年リーダー100人会議など

(4) 「多様性」に対する評価が変化→過疎地域の「強み」としての多様性に

7. 講義の感想

原発推進派と反対派に分断されていたまちが、奥能登国際芸術祭によって様々な人が繋がり、市民の中に一体感やシビックプライドが生まれたのではないかと。『能登半島里山里海自然学校』『能登半島おらっちゃん』等の取り組みや、大学連携といった10年以上にわたる人材育成の蓄積があったからこそ、芸術祭が起爆剤となり、芸術祭そのものの成功にも繋がったと思う。こうした地域資源(人材も含め)を活かした政策に転換した泉谷満寿裕市長(2006年・平成18年～)の手腕も大きかったと感じた。

